

峨山韶碩禪師についての諸問題

田 島 柏 堂

峨山韶碩禪師（諡號は大現宗猷國師）は、鎌倉中期より南北朝中期すなわち十三世紀の末葉より十四世紀の中頃にかけて生存した人である。禪師は、日本曹洞宗の太祖、總持寺開山、瑩山紹瑾禪師の後を承け繼いで、同寺二世を董し、洞上の玄風を高揚して、中世の中期から近世初期にかけての、曹洞宗發展の上に偉大なる功績を残されたのである。このことは宗派傳播史上重要な意義を有し、かつ日本曹洞宗史上に極めて大きな地位を占めている。一般に鎌倉時代の佛教といえは、多く法然上人・親鸞聖人・日蓮聖人・道元禪師等の名を挙げ、その人格、宗教を稱讃している。然しこれらの高僧が一世に名を成すにいたつた實際の力は、もちろん高僧たち自身の強き信念と、偉大なる人格とによることはいうまでもないが、しかしその裏面に幾多の尊き援助者―内部的助力―のあつたことを忘却してはならない。例えば法然上人における源智、親鸞聖人における眞佛、日蓮聖人における日朗、道元禪師における懷井等の諸師は、いずれも師匠の側近に奉事し

て、その宗教の大成に奮闘した人々であつた。これを瑩山禪師の生涯について見るに、やはり峨山禪師の副貳營辦の力すなわち内部的助力によつて、よくその目的を遂行されたものといふことができる。思うに禪師は、瑩山禪師とはわずか八つ年下であり、また瑩山禪師に三十年も鉗鎚を受けておられるので、瑩山禪師もその人格を知悉されており、かつ峨山師は能登の出身であるから、地方人とも親しみ多く、寺門の經營には好適の境遇にあつた。従つて常に瑩山禪師の相談相手となり、いわゆる女房役として各種の問題に參畫されたことと推考される。かように瑩山・峨山兩禪師の間柄は、全く異體同心の關係にあつたといふことができる。江戸時代の宗匠、徳翁良高和尚は、『西來家訓』に「……若し瑩峨（瑩山・峨山）二大士を得て緒を續がずんば、則ち恐らくは永平の門風、地を拂つて盡きんのみ、嗚呼、聖皇尚お歸崇の詔あり、後昆曷ぞ感荷の心無けん、各各兒孫、應當に靈蹤を景仰し、二尊を瞻禮し、用つて覆蔭の徳に酬ゆべきなり」（原漢文）と述べ、

日本曹洞宗という宗門的立場からは、兩禪師の歴史的 성격が、一を採つて他を捨てることの出来ないものであり、「瑩峨兩尊」と並稱し、瞻仰禮讃すべきことを明らかにしておる。されば瑩山禪師の人格、宗教が、日本佛教史の上に重要な位置を占めているとするならば、峨山禪師の功勳もまた自ら大をなすといわなければならぬ。いま禪師の業績を、懷昇禪師の業績に比較すると、總持寺二祖としての峨山禪師は、瑩山禪師の遺志を繼いで、曹洞宗の社會的發展の基盤を築成されたのであり、永平寺二祖としての懷昇禪師は、高祖道元禪師の思想を繼承して、宗門教學の根基を樹立されたものということができる。しかし峨山禪師の曹洞宗に占める地位は、かような教團史的意義のみならず、教學史的な場においても重視すべき點が存している。いずれにしても懷昇・峨山兩禪師における永平寺・總持寺の二祖としての存在は、道元・瑩山兩祖の思想・教團を布衍・伸張させた一大原動力となつてゐることを知らねばならぬ。思うに日本曹洞宗は、道元禪師によつて開かれ、その禪師の待たれた正法激揚の時は、懷昇禪師を経て瑩山禪師におよんで漸く到來し、遂に峨山禪師によりこれが實を結んだということができよう。しかして峨山禪師の會下には、多くの僧衆が雲集し、これら諸龍象の中から、すぐれた人材が輩出し、主要なる門人を「五哲」或いは「二十五哲」などと稱している。こうした人々たちによつて、その

法燈が續けられ、中世における曹洞宗の最大の門派「峨山派」という一つの新しい主流をつくり出すにいたつた程である。要するに峨山禪師は、瑩山禪師が北越の山奥より正法禪のともしびを、能登の邊陲に移し擧揚された深意を體して、これを更に多くの門弟に分與し、その法燈が全國的に傳播し、それが今日およそ一萬五千の寺院と約三萬の僧侶と、多くの檀信徒を擁する一大宗團を形成するにいたつたわけである。實に峨山禪師は、當時すでに眞實の人間形成と教團のビジョンについて深く思いをいたし、粉骨碎身されたのであるが、これまさに「人間づくり」・「宗團の生き方」という今日の意義をもつものとして、大いに注目しなければならぬ。されば中世における峨山禪師の登場は、日本佛教史の、廣くいえばわが國の歴史の上に、重要な意義を有すると共に、その精神はいまなお現代思想の中に脈々として生きていることを知らねばならぬ。時恰も昭和四十年は、峨山禪師が貞治五年（一三六六）に入寂されてより六百年に相當している。よつて宗制の定めるところに従い、禪師の六百回の大遠忌法要が、四月一日より大本山總持寺において嚴修される。私は峨山禪師の大遠忌という、この半世紀に一度の値い難い勝縁を機に、從來の禪師に關する諸種の文獻史料に、新史料および實地踏査をも加え、これらを基礎として、あらゆる角度から總合的に研究をすすめる、禪師としての峨山師の人間像を浮彫りにする

と共に、いささかその鴻業を顯彰し、遺徳を讃仰したいと思ふ。從來、峨山禪師の傳記史料としては、單獨の別傳に『峨山和尚行狀』、『總持二代峨山大和尚行狀』(慧明撰・慶安四年寫)、『峨山大和尚芳躅』、『總持二代和尚抄割』(寫本)があり、總傳體の中に含まれているものに『洞谷五祖行實』、『諸嶽開山二祖禪師行錄』、『日域洞上諸祖傳』卷上(自澄撰)、『日本洞上聯燈錄』卷二(秀恕撰)、『延寶傳燈錄』卷七(師贊撰)、『本朝高僧傳』卷三十一(師贊撰)、『扶桑禪林僧寶傳』卷五(性澈撰)、『瑩峨行實集錄』(貞享五年寫)等が存する。右は江戸末期までのものについて、書目を掲げたのであるが、なお明治以後に著わされた書冊としては、僅か『峨山禪師行實』(道海・靈林撰)一卷が存するにすぎない。その他は、總傳體の中に前記の傳記史料を、だいたひそのまま踏襲して敘述した程度のもので、研究資料としての史的價值に乏しい。また禪師の史傳および思想の研究に關しても、二、三の論稿を除いては、何等見るべき勞作が現われていない。ということは、特に史傳についていえば、かように傳記史料が傳來していても、内容的には龍蛇混雜の状態であつて、眞偽の判定に苦しむ點が、しばしば存するという理由に基づくと思う。かくして禪師の生涯、思想については、古來諸種の異説があつて、いろいろの問題を提供している。すなわち(1)諱の韶碩と紹碩の字について、(2)生誕および入寂紀年の異説、(3)俗系

についての問題、(4)叡山における修學について、(5)瑩山・峨山兩禪師初相見の年次と場所についての異説、(6)入元説の眞否、(7)明峰・峨山禪師の法兄弟論、(8)著書『山雲海月』の眞偽論、さらに禪師における(9)佛法・教化の問題點などを數えることができる。この際右の諸問題の一一について、確實な資料に基づき、これを考究したいと思う。しかしここには紙數の關係上、この中(3)俗系についての問題のみを述べることにし、その他は別の機會に論及する。

禪師の俗系については『行狀』『芳躅』『抄割』に「俗姓源氏、冷泉亞將某之遠孫也」と記しているだけで、何等具體的に述べていない、まず俗姓が源氏であつたことは明らかであるが、しかし源氏と稱しても、それにはさまざま系統がある。『尊卑分脈』には、醍醐・村上・嵯峨・仁明・文徳・清和など、各種の系統を擧げているが、禪師所出の源氏はこの中の一であるに相違ない。次に冷泉亞將についていえば、亞將は官職に對する名稱であつて、つまり大將に次ぐの意で、近衛中將または少將の異稱であり、冷泉は地名である。そこで冷泉亞將と稱しうる人を探査するに、藤原定家(仁治二年〔一二四一〕歿)、その子爲家(建治元年〔一二七五〕歿)、その嫡男爲氏(波弘安九年〔一二八六〕歿)の三人が浮んでくる。定家は建仁二年(一二〇二)より承久頃(一二二一)まで、京都の冷泉(京都市中京區竹屋町の南、堀川の西、すなわち二條離宮の

東北にあたる地名）に住んでいたので、冷泉中將と稱せられていた。^⑤されば冷泉亞將は、定家を指すものとも考えられる。しかし定家は後に冷泉侍従・冷泉宰相・京極中納言などと呼ばれているから、傳記作者が殊更にこれらより下位の亞將を記載したとは考えられない。なお後世、定家はふつう京極黃門をもつて呼ぶことが多い。また爲家、爲氏では遠孫とはいいいにくくなる。冷泉家は藤原氏である。しかるに俗姓源氏というのであるから、その冷泉亞將の女が、源氏に嫁したと考えられるが、上記三人の女は源氏には嫁していない。このように種々の點よりして、定家と想定することは、いささか無理なようである。それでは冷泉亞將なる人は誰かということであるが、これについては今後の考究に俟たねばならない。なお『洞谷五祖行實』によれば、「岡部氏、六彌太後胤也、母藤原氏」と記しておる。この『行實』の著者は明らかでないが、その成立年代は本書の内容よりして、江戸初期といわれている。「岡部氏」なる出據については詳らかでない。鳳山慧丹和尚（總持寺山内、芳春院八世）はこの説をうけて手記に「或説に和尚師の父公、瓜生村より丑の方三里今濱村の向ふ東間村に岡部六彌太忠住が屋敷あり、其の並に師の父公住宅地と云ふ名あり、則六彌太の孫にて岡部氏と云ふ、然る則んば兩處に居住ありしや」云々と見えている。いまその史實の如何については論ずるまでもないが、江戸時代かように禪師の俗系

が問題視されていたことは、まことに興味が深い。そこで私は、右とは別に禪師は源氏の出身ではあるが、或いはこの地方の豪族得田氏一族關係の人ではないかと推定するものである。すなわち鎌倉時代の初頭、文治二年（一二八六）源頼朝は、能登羽咋郡の得田莊に、得田章通（生没不詳・徳田氏の祖）を地頭職に任じておる。同氏はそれ以後代々相繼いで羽咋郡に勢力を張り、能登地方の豪族となつた。瑩山禪師が、能登にきて最初に開かれた光孝寺のごときは、その頃の地頭得田章信が佛門に歸依して羽咋領内の寺址に建立し寄進したものである。^⑥いま殊更、光孝寺大檀越・羽咋の地頭職としての得田氏と峨山禪師の俗系とを結びつけようとするものではないが、禪師生誕當時における周圍の事情よりして、恐らくその家系は源氏の流に屬し、得田氏またはその一族關係の人ではないかと推察される。禪師の俗系について、一應吟味したのであるが、何分にも史料が乏しいので、これ以上に想定することはできない。禪師は、いずれ能登地方における有力な武人の系譜につながる家柄の出身であるけれども、その父母が何人であつたか、これを詳しく知ることができないのは甚だ遺憾である。思うに道元・瑩山兩祖は、名門の出身であつたが、清淨の大海に朝宗せる出家人は同一釋氏であるから、これに族籍の尊卑を付すべきでないという立場より、一生族姓や家系については示されなかつた。その法流を傳承された峨

山禪師も名門の出身であつたにもかかわらず、兩祖と同様の主旨から、生涯族姓や家の系譜については説かれなかつたものと推測される。禪師の家庭は父母ともに深く佛教に歸依し、禪師は文殊大士『行狀』は千手觀音と記す、他の諸傳はすべて文殊大士と記しているの授け子であるだけに、諸傳ともに幼少より「穎脫清標拔俗」(『行狀』)とか、「風貌清奇、氣宇超邁」(『日域洞上諸祖傳』)とか、「生穎敏異、常兒」(『日本洞上聯燈錄』)などと記している。ややもすればこのような記述は、幼少時代における禪師の聰明ぶりを誇張したもののごとくにも思われがちであるが、しかし後日の禪師のあの非凡さに思いをいたす時、これは決して傳記作者のただ單なる修飾や誇張でなかつたことが首肯されよう。なお禪師の父母はいつ頃亡くなつたであろうか。これについては詳らかでない。ただ母親については、正安元年(一二九九)春、禪師二十四歳の時、瑩山禪師に加賀大乘寺において再度の相見をされた折、只今年老いた母が存命中で、自分が養つておるといふことを述べておられる(『行狀』・『芳躅』・『抄割』¹⁰)から、當時父親はすでに亡くなつており、幸いに母が生存されていたことが知られる。母はそれより後いつ頃か亡くなり、法名を「妙心大姉」と稱した。しかし禪師は、修行のために恩愛の絆をたつて、一度は母親と離別されていたが、晩年には老母のために總持寺内の一隅に妙心庵を建てて、孝養を盡くされ

たと伝えられているから、母親は餘程長壽をたもたれたことが想像される。その亡くなった年時については不明である。『能登國名跡志』(乾卷)の「總持寺」の項には、「また右の山を龜山とて龜形の山にて、開山墓所なり、二世峨山和尚の御母墓所……など有り」云々と記されている。大本山總持寺の舊址すなわち能登總持寺祖院(石川縣鳳至郡門前町所在)境内の墓地龜山の麓には、「妙心大姉」と誌した禪師の母の石碑(自然石)が建てられている。これが今日の曹洞教團の大きなしみて、遠くその昔が偲ばれる。

- 1 『曹洞宗全書』語錄三、二六頁。
- 2 筆者不詳・兵庫縣永澤寺藏(『通幻禪師全集』所收)。
- 3 筆者不詳・永久岳水氏藏。
- 4 不傳(式燈)和尚記、京都大學谷村文庫藏。
- 5・10 『抄割』は「俗姓出源氏」とあり、また『芳躅』・『抄割』はともに「冷泉溪亞將之遠孫也」とあって、『行狀』と殆んど同文である。『續群書類從』第九輯下、五七八―五七九頁、『曹洞宗全書』史傳下、二六三頁、『同全書』語錄一、四三頁。
- 6 石田吉貞博士『藤原定家の研究』七七―九六頁、村上修一氏『藤原定家』(人物叢書⁹⁵)。 7 『曹洞宗全書』史傳上、五九八頁。 8 栗山泰音師『總持寺史』一五七頁。
- 9 『光孝寺文書』、『永光寺文書』、『洞谷記』。
- 11 『大日本地誌大系』(諸國叢書北陸之一)二七四頁。